

特集 山村留学生へのまなざし

山村留学生は日々、ホームステイ家庭や教職員、地域の方々など、大変多くのみなさんに支えられて生活をしています。そして、一人離れて生活する子どもたちを何よりも後押ししているのは、遠く離れたご家族の思いです。今号では、それぞれの立場のみなさんが、時には厳しくそして時には優しく、どのような考えをもって山村留学生を見守っているかをご紹介します。



● 出典…「育てる」通巻148号 昭和55（1980）年10月25日発行

町っ子、村っ子

〔話〕 諏訪 義十さん、あき子さん

（八坂学園受入農家）

義十さん

「はじめ預かる時は心配だった。何しろ田舎の子どもと都会の子どもとは、顔の色から違うし、これで冬が越せるか……大変な子を預かったものだと思った。最初に預かった子どもは特に色白で、か弱く見えた。これはえらいことになった。まず、夏が越せるか、と心配だった。何しろ東京の夏と違って、ここの夏は涼しいし、環境の変化に耐えられるか心配だった。ところ



が、それが本当に健康だった。われわれが見たより体が丈夫だった。かえって八坂の子どもの方が、かぜをひきやすいということがあった。都会の子どもの方が元気にしている。歩いているからかも知れない。

曾山地区の子どもはスクールバスがあるが、学園の子どもたちはだれも乗らない。センターの指導で歩くようにさせられている。顔色は全般的に見て青白く、か弱く見えた。太陽にあたっていないのかと思うくらいだった。しかし、いがいに丈夫だった。無事に夏を越した時、これならいけるぞ、と思った。冬までに抵抗力をつければ、きびしい寒さに耐えられると自信がついた。当初は地元の子どもについて行けなかったが、八坂の土地になじませながら体力をつけていけば、夏を越したのだから冬も越せると思った。事実、きびしい冬にかぜもひかずに頑張り通した。体が弱いということはないね。むしろ八坂の子どもの方が、寒いといつては厚着をして風邪をひきやすいね。都会の子どもの方が健康だと言えるが、顔の色は全然違うね。入園式の頃はこれで大丈夫かと思うけれど、その割には健康だと思う。八坂小の子どもを見ても、都会

の子どもの方が歩いている。車に乗る生活を少し考えなければと思う。このままじゃ、まずい。

五年間、都会の子を預かってみて、かぜをひいて医者につれて行ったことはあまりなかった。それは、春の気候の良い時に八坂にきて、鍛えたことが一番よかったということだね。

子どもの足で、小学校まで曾山からだど六キロ、中学校まで八キロ以上ある。それを『歩け！』つたって、これはえらいことだ。車をすぐ使う。これが体力をだめにしてしまう。地元の年寄りが、都会の子どもに見習っている。」

あき子さん

「顔色と、スマートなことが目立った。もともと浅黒くはならないが、一年間のうちには大変変わる。

都会の排気ガスとかでのどを痛めた子どもが、治ったというのを聞いたが、体力はあった。都会では学校まで五分位というのが、ここではそんなわけにはいかない。

自分がやらなければならない、という信念を持つて

来ていることは、たのしいね。

食事も体力につながると思うが、都会と農家は違う。その点が、なれるまで大変だと思う。都会では肉食が主だったのが、ここでは野菜が主になる。しかし、文句を言うことはいけないと思うのか、文句一つ言わないで食べている。野菜をあまり食べたがらないで八坂に来ている場合は、一時体力が落ちる。そして、だいたい固定していくまで、食べ物には十分気を配っている。肥満な子どもは一か月に二キロ〜三キロ体重が減るが、かえって調子が良い。魚や肉もよいが、その倍位の野菜を食べさせるようにしている。はじめのうち野菜が食べられない子どもでも、そのうち食べるようになる、少しずつ体力も回復してくるようだね。実家に帰ってから思い出して『あの野菜の味は忘れられない』とか『煮物がうまかった』と言っている子もいる。子どものうちは、どうしても野菜を食べたがらない子が多いね。」

義十さん

「都会の子どもは、健康ではあるけれど、力がないね。

それでもいろいろやらせてみて、一年いると、手放すのがもったいない位になる。二年、三年いる子どももあるが、農家としての一つの願いは、根気と体力をつけてもらうのが、一番の目的だと言える。

自然の中で、こうしたことをしている子ども——これは、八坂の子どもにとっても大変良い勉強になっている。都会の子に負けてはいけない、ぜったいに……。甘えた、この農村を成長させなければいけない。八坂の子どもも、『都会の子どもに右へならえ』ということで、大変いい傾向に出ている。

体力づくりがいろいろにつながっていく。自分の努力で、一年間たてば、そうとう変わってきている。『二年たてば、どこにいたって、発育ざかりの子どもは伸びるのがあたりまえだ』と言われるかもしれないが、五年間預かってみて言えることは、はじめは色も白いし、どことなく弱い感じがするけれど、一学期の終わり頃になると、八坂の子どもと見分けがつかないほどになる。それに、手も変わってくる。どことなく力があるというか、指の節がごつくなつて、都会の子どもらしくなくなってくる。朝は忙しいし、日曜日も

いろいろやる。今は大根抜きや大根洗いなどをやらせるが、みんな根気よくやる。農家の子どもでもなかなかやらないが、育てる会の方で指導態勢をとってくれるので、子どもがよくやる。

今の農家は機械化が進んでいるので、なかなかお手伝いすることがない。だから農家というものはこういうものだという姿がほしい。農家としては、できるだけのことをして子どもたちに農家を知ってもらいたいと思っても、思うようにいかないことがある。そうした時、一週間のセンター指導でいろいろ教えられたり、実際にやってるので、子どもたちは喜んでいる。

都会と田舎の子どもの差はあまりない。どんなことでも、そのものをやりやすい環境に置けば、だれだってやれる。大人だって、子どもと同じではないかね。都会の子どもは口が先で、体がついて行かない。八坂の子どもの場合は、一つの例をとつてもわかるけれど、学校の周りは花がたくさん作られている。特に大輪の菊はみごとなものだが……。それは全校生徒の作品で、一年から六年までが一生懸命で育てる。小さい一年生でも自然に肌で覚えられるので、とてもいいこ

とだね。

だれだってやる気は十分持っている。ただ環境によつては、持っているものが出し切れないではいると思うがね。そうしてみると、今、八坂に来ている子どもたちは本当に幸せだと思うね。

いや、わたしらも幸せだと思う。たまに大町に買い物に行くことがあつて、連れて行くと、『これみんなあんたの子どもかね』と聞くので、『そうだ、みんなおれの子どもだ』と言うと不思議そうな顔をしている。そうするつていうと、こういう一つの組織を通して都会の子どもを預かっている、と言うと『うちの子どももそういう所に預けられたら……』と言っている。大町の子でさえ、都会つ子と同じなんだね。

中学生はあまりしゃべらないだよ！ 子ども同士は話をするが、大人とは話したがないだよ。」

（中学生について）

「中学生は（実の両親ではないという）意識を持つだが、そういう意識を持つことはよくない。（こちらの実の子ではないという）潜在意識を持つてはいけない、とふみきつた。何でも注意する。意識すると向こ

うも意識してくるので……。お互いに何でも言えるようにしている方がいいね。どうかすると子どもにも忠告されることもある。『こうした方がいいでねえかや』と……。それが非常にいいだね。」

（修園生について）

「一年、二年ではそれほどでないけれど、四、五年にもなると、たまの休みに『ただいま!』といって帰ってくる。そして、自分の部屋だった所をなつかしそうに眺めながら『今何人いるの』と聞いたり、一期の子どもの中で新潟から来た子どもは、お勝手から入って『変わってない』とひと言いった後、座敷に入って行った。こうして、自分のふるさとにして帰って来てくれると、本当に嬉しいね。」

子どももこの八坂に来たことによって仲間ができ、会を通してさまざまな経験をすることができたこと、これは子どもにとっては本当に幸せなことだね。子どもを手放す親は、きつとつらいと思うがね……。

農家のお父さんお母さんはお前たちの世話をしているけれど、東京のお父さんお母さんに感謝しなさい。お父さんお母さんに負けない人間にならなければいけ

ない。こういう会があつて、いろいろな経験をするためにここに来ている。これは最高の幸せと思わなくてはいけないよ、と言っている。」



●出典：『育てる』通巻330号 平成8（1996）年1月25日発行

八坂むかし話

高橋 正乗（八坂学園留学生保護者）

むかしむかし、あるところにお酒が好きで賑やかなおじいさんと、優しくて綺麗なおばあさんがいました。二人は、のんびりやで期限が迫らないと動き出さないマイペースの広ノ介と、一人遊びが好きで引つ込み思案の愛姫、それから、筋が通らなければどんな相手にも向かっていく、向こう水の飛丸の三人の子どもを授かり、一生懸命可愛がり、子どもたちを育てていました。

ある日おばあさんが、広ノ介の短所を長所として伸ばすには、遠くの山に修業に出すと良いと山留道場の案内状を持ってきました。さっそく山留道場の説明会に行つて、青木師範の話聞き、広ノ介を山へ修業に出すことに決めました。しかし、二人は広ノ介と別れて暮らす寂しさと、山の修業の不安で胸がいっぱいになつて涙が止まりませんでした。

そうこうしているうちに、とうとう山へ行く日にな

り、二人は山まで広ノ介を送つていくことにしました。朝早く家を出て夕方近くに山に着いて、そこで見た雄大なアルプス、きれいな水と空気に触れて不安は少しづつ消えていき、道場開きの夜の飲めや歌えの大宴会で、おじいさんはもうすっかり山が気に入つてしまいました。そして、その翌年、まだ年端も行かぬ飛丸を、つづいて愛姫を修業に出してしまい、気がつく二人きりになってしまいました。生まれつき楽天的な二人は、同じ目的で修業に来ている子どもたちが我が子のように思えて、三人の子どもを出して四十数人もの子どもが増えたと喜んで、毎日楽しく酒を飲み、山へ行つては毎晩大宴会をして、時のたつのも忘れてしまいました。やがて、三年間の修業を終えて帰つてきた広ノ介は、村の人々の温かい思いやり、山留道場の先生方のご指導によつて大きく成長して、二人は大変喜びました。

二人は、まだ修業を続けている愛姫と飛丸の成長を楽しみにしながらお酒を飲み、村の人々の優しさや、山留道場の先生方の恩、仲間たちの励まし、そして豊かな自然に感謝することを忘れず、毎日、毎日、楽し

く幸せに暮らしました。めでたし、めでたし。



●出典：「育てる」通巻381号 平成12(2000)年4月25日発行

「僕の妹」——二年間を振り返って——

北相木学園留学生兄

妹が山村留学に行くと言ってからもう二年も経ってしまった。妹が山村留学に行くと言った時、ぼくはびっくりした。

お父さんは、もう大反対して、妹は部屋にこもったきりで、出てこなくなった。ぼくは、どうして行きたいのか、妹に聞いた。すると妹は、「村に行って、もっと強い心をもてるようになりたいの」と言った。ぼくは、「別に村に行かなくても、充分にMは強いよ」とすこし強くおこった。それっきり妹は、ぼくに口をきかなくなった。妹はお父さんの反対を押し切って、山村留学に行った。

ぼくは、もう一年間会えないんだあと、思った。すこし寂しかった。行事で村に行き、別れの時が来ると、涙をいっぱいにとって下を向く。ぼくは、「泣くなよ。泣かない約束で、山留にきたんだろう。がんばれ」とすこし強く言った。そして、もうすぐ正月。家

族みんなが妹が帰って来るのを楽しみに待っていた。明日、村に帰る日の夜、妹が「二年目を続けさせて下さい」と、ねている父の横に座った。「理由は二つあります。やり残した活動があるので、それをやりたいのと、もう一つは、新聞配達がしたいです。」

父は、あまりにも予想外なことを妹が言ったので、ねていた体もすわってしまった。父は、「一年だけだと思つて、お父さんは、がんばつてたのに」と言つて、そのまま下を向いてしまった。また、反対を押し切つて出ていった。また、長い一年間の山留生活が始まった。

二年目はあまり泣かなかつた。それは少しずつ妹と強くなっているのかなあと思つた。妹が山村留學に行つて二年、父も母もぼくも弟も、妹の部屋のベッドで時間をすごすことがあつて、みんなが妹といつしよにいたいんだなあと感じるものがあつた。

妹は、かんご大学に行つて、救急救命のかんごふになるのが夢で、そのための山村留學でもあつた。妹の夢がかなうといいなあと、ぼくは思う。いろんなことがあつた二年間だったけど、Mは、ぼくのじまんの妹です。

●出典…「育てる」通巻409号 平成14(2002)年8月25日発行

離れてはじめて見えるもの

邑上 雅孝(美麻学園留學生保護者)

「来年は残ります。なぜかというとまだまだ遊び足りないからです。」

息子・貴厚たかひろがそう宣言してから早や一年。時間の経つのは実に早いものです。貴厚が山村留學を始めてから二年。ようやく子どものいない暮らしにも慣れ、また、センター通いの道中にも多少ゆとりをもつことができるようになりました。

一年目の貴厚は自分で行くと決めたもののさびしさがつのりころが大きく揺れ動き、私たちもまた不安や心配の気持ちが強かつた。しかし、二年目を迎え貴厚も大きく成長したように思います。「百パーセント自分の意志で」継続を決めた二年目の山留生活。彼は彼なりのやり方で一生懸命やつたのでしょう。その彼を大きく感じたのが昨年の収穫祭の文集でした。そこには、彼を育ててくれている人々への感謝の気持ちが短い簡潔な文章で綴つづられていました。

また、親子スキーの際には先に滑つてはまた戻るところを繰り返しながら、アルペンもノルディックも、スキーは初めてという母親をさりげなくサポートしながら最後まで付き添つて滑つてくれた息子の姿に、彼も自分の気持ちを素直に言葉にしたり、態度や行動に表すことが（しかも自然に）できるようになったかと（元来優しい子ではありましたが）…。そんな彼が私たちの息子であることを嬉しく、誇らしく思えた一年でもありました。

また、親と子が離れて暮らしているからこそ見えてくるものがある、わかってくるものがある、ということとをより強く実感したのも、二年目の山村留学でした。私たち親は、子どもがそばに居ればいたで、かえつて目先のことにとらわれて、もしかしたら見えてこないことの方が多いのではないか。離れているからこそ、子どものちよつとした変化や成長の度合いがはつきり見える。たまにしか会えないからお互いを思う気持ちもより深くなる。いつでも、どこにいても子どもとつながっている…という感覚をいつまでも大切にしたいと思います。

さて、二年目を終える息子・貴厚ですが、どうやら六年生も美麻八坂で迎えるようです。やはり「まだまだ遊び足りない」のでしょうか。昨年は美麻八坂で一大酒ぶたブームを巻き起こしましたが、来年度はどんな姿を見せてくれるかとても楽しみです。

この間、雑誌をめくっていたら宮沢賢治の言葉が目にとまりました。前後の文章は不明ですが、山留生諸君に捧げます。

「世界に対する

大いなる希望をまづ起こせ。

強く正しく生活せよ。

苦難を避けず直進せよ。

風とゆききし

雲からエネルギーをとれ。」

●出典：『育てる』通巻424号 平成15（2003）年11月25日発行

「ウジャマー」の八坂村

丸山 高德（元八坂小学校教諭）

タンザニアから帰国した友人から、昨年聞いた話です。タンザニアの伝統的な基本精神は「ウジャマー（相互扶助、家族愛）」。それは、国の宝は老人・子ども・客人・それに障がい者であるということ。老人は知恵を、子どもは希望を、客人は新しい知識と技術を、障がい者は命の尊さを持つているからだということとです。

客人は最初の時だけで、翌日からは友人になるのだそうです。世界で第四位に貧しいとされるタンザニアでは、わずかな物でも分け合い、助け合わなければ弱者は生きていけないということです。自分とは異質なものを持つている他者の立場を認め尊敬する豊かな心を持つて元気に生きているということです。

この話に出てくる客人は、正に山留学生のことだと思いました。収穫祭の発表で中三の留学生が、「私は八坂村からたくさんのことをいただいたけれど、八坂村

に対して何ができたかわからない」というような内容を語ったように思います。そんなことはありません。山留学生は八坂村にたくさんのことを与えてくれている友人です。

私の学級でも、みどり色はますますエメラルドに輝き、あお色は澄み切った青空のような広がりをいたるところで発揮していました。みどり色はMさん、あお色はAさんです。二人とも学級になくはならない存在です。新鮮な知識や技術をもとに、学級の子どもたちを刺激してくれます。すでに客人ではなく、かけがえない友人であり、これからも生涯にわたって友人であると信じています。

ウジャマーの精神は、八坂村に必要であり、ぴったりにしているように思います。そんな意味で、山留学生は、益々自己発揮し、知識や技術を与えていってほしいと思います。

再掲載を受けて――

想いを寄せて

邑上 貴厚（現・山村留学指導員）

「1分でもいいから、1秒でもいいから、家に帰らせて欲しい！」私が父を目の前にしてそう泣き叫んだのは、今から22年前の9月のことだった。当時小学4年生だった私は、日々募る寂しさに耐えかねて、父が学校行事で来園した際にその感情を爆発させた。学校行事が終わり、父の車に乗り、受け入れ家庭（農家）の家へと向かっている最中のことだった。

本来ならば、そのまま受け入れ家庭へと戻り、山村留學生活に戻っていくはずだった。しかし、家の前まで来ても、私は父と別れることができなかった。

そんな様子を察したのか、受け入れ家庭の母さんが外へ出てきて、「少し、父さんと出かけてきたらどうだい？」と声をかけてくれた。

こうして、私は、冒頭の言葉を繰り返しながら、再び父の車に乗ってホームステイ先の家を後にした。

父は、そんな私の訴えを黙って聞きながら、車を走らせた。10分ほど車で走った後、夕陽が見える丘の上の診療所近くで、私たちは車を降りた。

「家へ帰りたい。」

私は何も言わぬ父に対して、その言葉を繰り返し続けた。同じ言葉しか言わない私に、父の表情が少しずつ歪んでいくのがわかった。

「俺だつて連れて帰りたいに決まっているだろう！」

父の目には涙が滲んで、声が震えている。

「そりゃ、俺だつてお前と一緒に暮らしたいよ。でも、自分で決めてお前はここにいろんだらう。」

その言葉を受けて、私は自分がなぜ山村留学をしたのか、ようやく理解した。

父が自分のために涙を流してくれたこと。自分だけが辛い気持ちではなかったことが、この時初めてわかった。「頑張ってみる。」父にそう告げると、父は私をホームステイ先の家に送り届けてくれた。

「いってきました。」玄関でそう告げると、父さんと母

さんが「おかえり。」と迎え入れてくれた。そして、私と一緒に父の車を見送ってくれた。

「おいたかひろ。今日のおやつ、とっておいただぞ。」と母さんは私に真つ赤に熟れた大きなトマトを手渡してくれた。この時食べたトマトの味は、忘れられない味になった。

留学生生活の中で、私は本当にたくさんの方に育てていただいた。実の両親の他に、自分の父さん、母さんと呼べる人は5人もいるし、3年間の間でたくさんの方の地域の方の家へ足を運んだ。そんな時には必ず決まって「なんだ、山村留学生かい？ ちょつと寄ってお茶でも飲んでいけ。」と私の存在を知って受け入れてくれる人がいる安心感とあたたかさがそこにある。「故郷」という言葉は、そういう場所のことを言うのだろう。

そんな私は、結局その後小学6年生までの3年間、山村留学生生活を堪能した後、今は指導員として、別の立場で山村留学と関わり続けることになった。

私が指導員として留学生を指導する際に、どうしても実家にいる親御さんのように学校の準備などの隅々まで見てあげることができていなかったり、都合上、色々と

無理を言って、ご迷惑をお掛けしたりすることが多々ある中、学校の先生方は「山村留学生は日々いろいろな刺激になっています。」と言って、勤務時間外にも関わらず、子どもたちの指導に時間を割いてくださる。

今回書かせていただいたように、もともとは、自分の山村留学体験として、このような家族での葛藤であったり、人のあたたかさに触れたことだったりを心に持ってきてきた。再掲載された文章を一つひとつ読んでいくたびに、(今回、まさか私の父の文章まで読むことになるとは思ってもみなかったが...) 私たち指導員はそうした想いを背負って日々の指導に当たらなくてはと、想いを新たにすることができた。

山村留学生は、本当に恵まれていると、率直に思う。これほどまでにたくさんの方が、一人ひとりのために想いを寄せる生活環境というのは、なかなか出会えないのではなかろうか。

